



事業計画及び成長可能性に関する事項

株式会社 WOLVES HAND

2024年6月20日





Contents

1. **会社概要**
2. **事業内容（ビジネスモデル）**
3. **市場環境**
4. **特徴・強み（競争力の源泉）**
5. **中期展望（事業計画）**
6. **APPENDIX**



会社概要

1



会社概要



会社名	株式会社WOLVES HAND	
本社所在地	大阪市西区南堀江三丁目7番22号	
設立	2019年4月	
代表者	北井 正志	
資本金	9千万円	
役員構成	代表取締役CEO	北井 正志
	取締役COO	山下 瞬
	取締役CFO	谷内 圭一郎
	取締役 (J-STAR(株)パートナー)	荒川 暁
	取締役 (社外取締役)	山口 克隆
	取締役 (社外取締役)	中田 浩
	取締役 (常勤監査等委員)	中筋 雅志
	取締役 (社外取締役・非常勤監査等委員)	岡田 崇司
	取締役 (社外取締役・非常勤監査等委員)	今春 博
	取締役 (社外取締役・非常勤監査等委員)	武田 信

主な事業内容

- 動物病院運営
 - ペットサロンの運営
 - 動物病院向けソフトウェアの開発
 - 獣医療教育セミナーの配信
 - 医療用機械器具の製造・販売

売上高	総資産	従業員数
46億円	54億円	397名

(2023/6期)



身近なケアから高度医療まで、
幅広いニーズにシームレスで応える動物医療の総合カンパニー

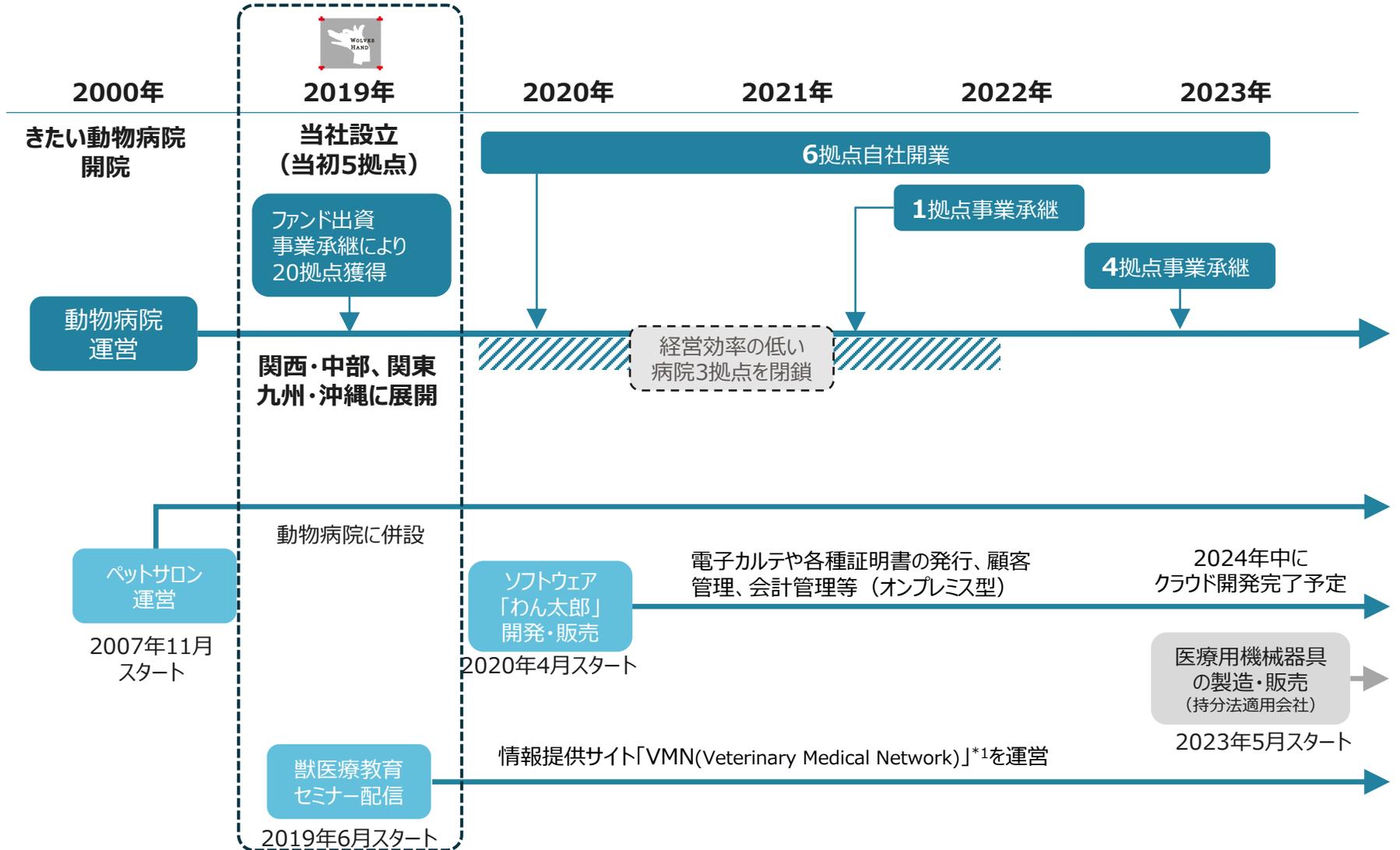
“どなたでも気軽に、最先端の検査や高度な技術、
さまざまな手術を受けられる医療を提供する”





主な沿革 ファンド出資を受けて設立。事業承継M&Aにより20拠点を獲得し、関西・関東・九州沖縄に展開

- 2000年に「きたい動物病院」を個人開院。2019年、ファンド出資を受けて資本力を強化（当社設立）し、事業承継M&Aにより20拠点を獲得。事業規模を一挙に拡大
- 2020～22年にかけて非効率拠点を閉鎖し、事業効率を引上げ
- 事業エリアは関西、関東、九州・沖縄
- その他、ペットサロン併設、病院管理ソフトウェア開発・販売、獣医療教育セミナーなど、動物医療関連の総合サービスも展開



*1:VMN (Veterinary Medical Network) 小動物臨床獣医師、獣医師をを目指す学生を対象に、様々な情報を提供するサイト

経営陣紹介－業務執行取締役



北井 正志 代表取締役CEO

1998年	4月	新田谷動物病院 入社
2000年	1月	きたい動物病院 開業
2002年	10月	堀江動物医療センター有限公司（後に株式会社大冬希に組織変更） 代表取締役就任
2007年	7月	株式会社Vパワー 代表取締役就任
2019年	4月	株式会社大冬辰 代表取締役就任
	5月	当社 代表取締役CEO就任(現任)

山下 瞬 取締役COO（動物病院事業本部長）

2011年	4月	株式会社大冬希 入社
2013年	7月	阿波座動物医療センター 院長就任
2017年	9月	大阪動物病院 院長就任(現任)
2021年	6月	当社 取締役COO兼動物病院事業本部長就任(現任)

谷内 圭一郎 取締役CFO（経営管理本部長）

2006年	12月	監査法人トーマツ(現 有限責任監査法人トーマツ) 入所
2013年	7月	税理士法人トーマツ(現 デロイトトーマツ税理士法人) 入所
2015年	12月	谷内公認会計士・税理士事務所 開業
2020年	6月	ヤマイチ・ユニハイムエステート株式会社 取締役監査等委員(社外) 就任
2021年	1月	ジー・エフ税理士法人パートナー 就任
2021年	11月	当社 入社、取締役CFO兼経営管理本部長就任(現任)
2022年	10月	株式会社モデナ動物病院 代表取締役就任



事業内容 (ビジネスモデル)

2





事業内容 売上の9割弱が動物病院事業

- 売上の86%は動物病院運営収入
- 動物病院は高度医療の「センター病院」とかかりつけ病院の「サテライト病院」を配置。爪切りから高度医療までを一貫提供
- その他の事業は、動物病院事業拡大を補完する目的で展開

売上内訳

その他 **14%**

- ✓ ペットサロン運営
- ✓ 動物病院向けソフトウェア開発
- ✓ 獣医療教育セミナー配信
- ✓ 医療用機械器具の製造・販売

動物病院運営 **86%**

- ✓ 関西エリア、関東エリア、九州・沖縄エリアの3エリアにドミナント展開
- ✓ センター病院を中心に相互ネットワークを形成し、シームレスにサービスを提供

売上高
46.5億円
(2023/6期)



『センター病院』 **11**拠点*

CTやMRIなどの高度医療機器を備え、専門分野を持った獣医師が診療実施



『サテライト病院』 **22**拠点*

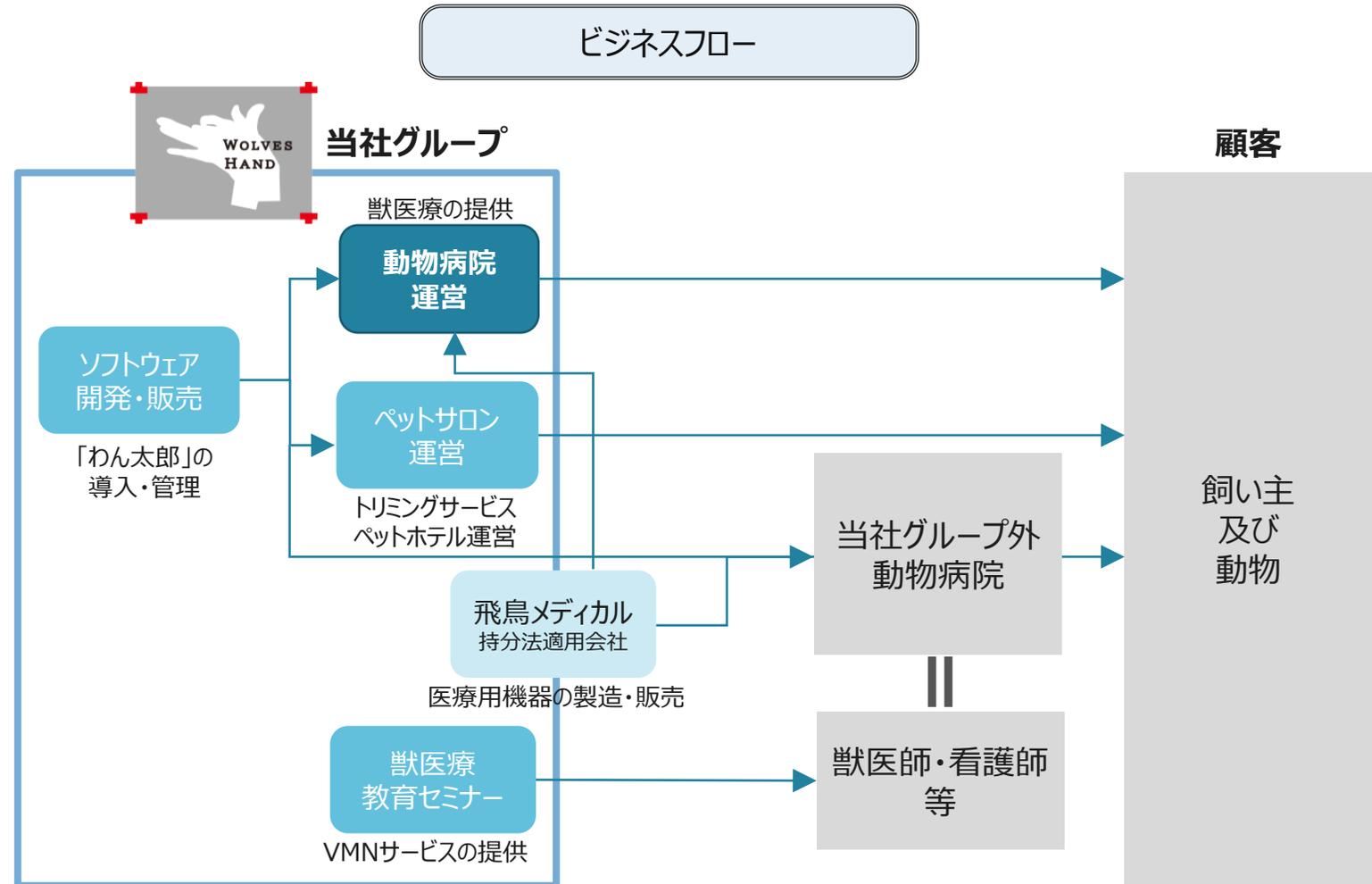
かかりつけ病院として、診療や簡易的な手術等を実施

(*2024年3月現在)



事業スキーム 動物病院運営がキービジネス。その補完目的でペットサロンなどの付随ビジネスを展開

- 動物病院の運営をキービジネスとし、ペットサロン運営など同事業の拡大に資する付随ビジネスも総合的に展開
- ペットサロン運営では、飼い主との接点拡大により、知名度や親近感を醸成（需要サイドの開拓）
- セミナー、ソフトウェア開発・販売、医療機器販売では、当社グループ外の動物病院や獣医師・看護師との接点を増やし、事業承継候補先をサーチ（供給サイドの開拓）

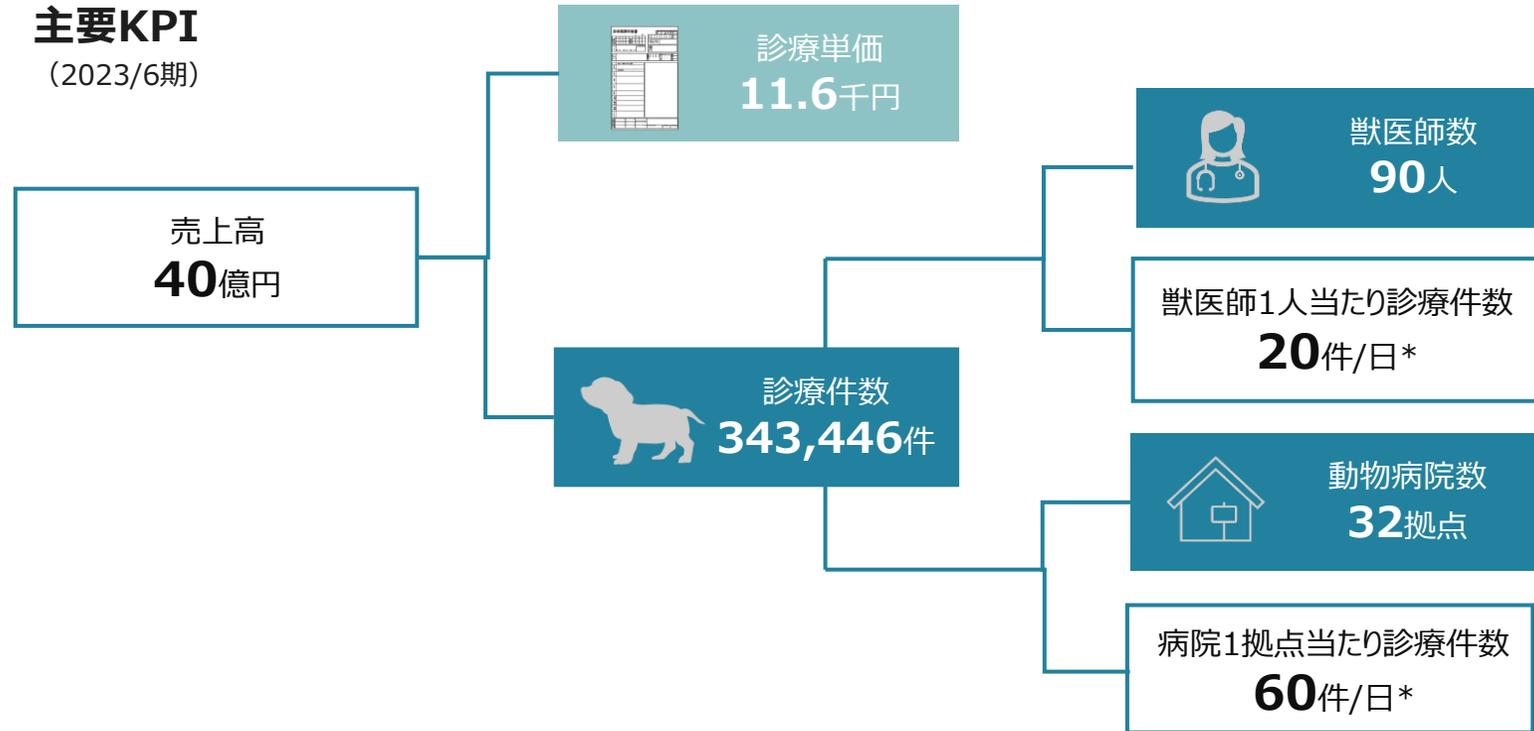




動物病院事業の主要KPI キャパシティと効率性・収益性を示す指標群

- 売上高の重要KPIとして、獣医師数、診療件数・単価、動物病院数
- 加えて、獣医師・病院当たり診療件数・売上高も重要指標

主要KPI (2023/6期)



その他収益性指標 (2023/6期)



(注) 2023/6期実績。 *年200日診療前提



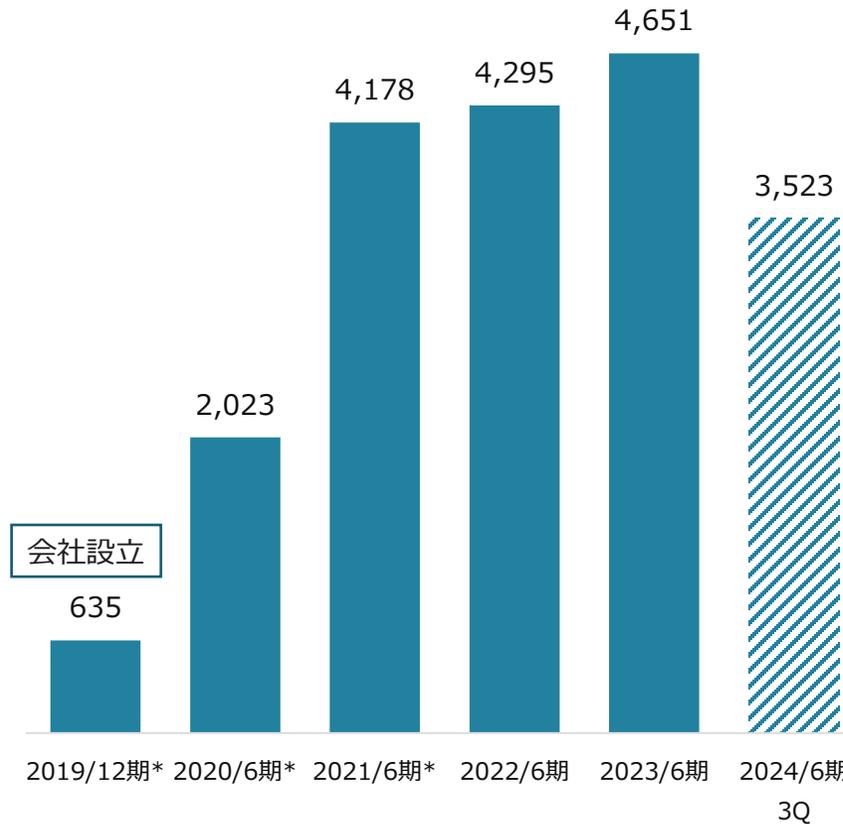
業績推移

2019年設立以降、事業承継等を経て増収増益。EBITDAマージンは20%超

- 増収増益を継続。2023/6期売上高は前期比8.3%の増加
- 営業利益率は15%前後で推移
- 会社設立時の企業結合に伴い発生したのれんが総資産の3割弱を占め（23/6期、15年定額償却）、減価償却費も含めたEBITDAマージンは20%超

売上高の推移

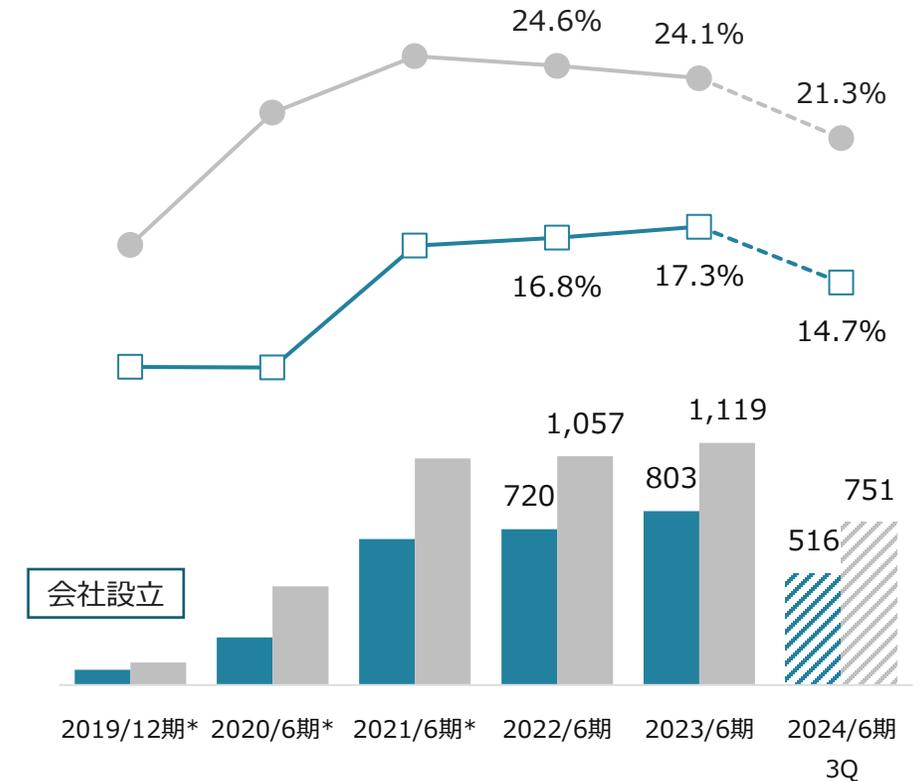
(百万円)



利益及び利益率の推移

(百万円)

■ 営業利益 ■ EBITDA □ 営業利益率 ● EBITDAマージン



*EBITDA = 営業利益 + 減価償却費 + のれん償却費

*2019/12期は9ヵ月、2020/6期は6ヵ月の変則決算（2019/12期は、2019/6に動物病院事業取込み、実質的に事業開始） 2021/6期以前は単体決算

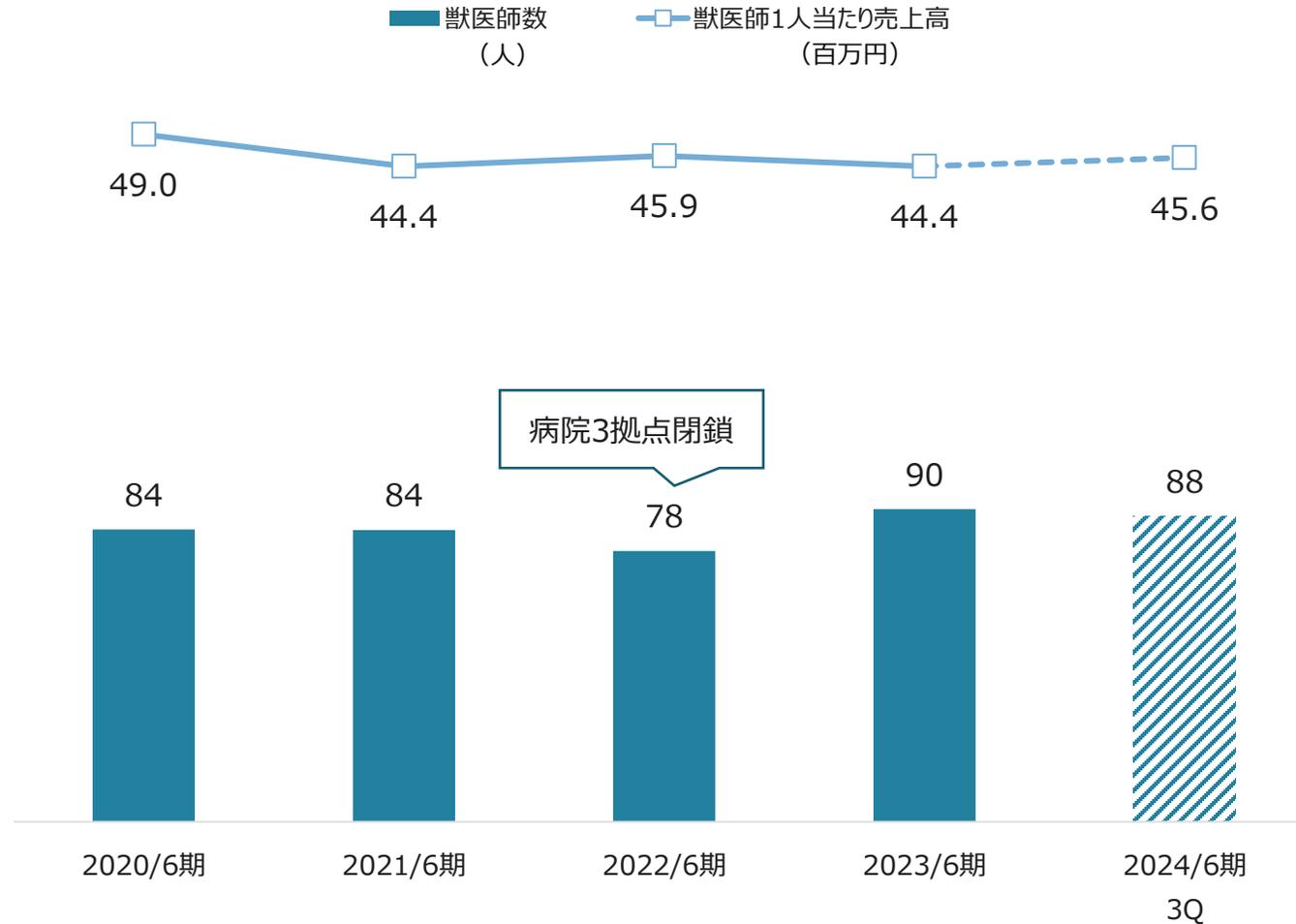


獣医師数及び1獣医師当たり売上高の推移

獣医師不足が慢性化する中、23/6期には獣医師12人を増員

- 所属する獣医師は直近88人。22/6期にかけて病院3拠点を閉鎖して絞り込む中でも継続的に獣医師を獲得。現在、拡大中
- 獣医師は基本的に人手不足が慢性化しているが、当社は大学病院への営業強化などにより新卒採用を推進し、増員を実現
- 獣医師1人当たり売上高は年間5千万円弱。獣医師は能力差が大きいですが、当社では教育研修などによる全体的な底上げが進捗

獣医師数及び1獣医師当たり動物病院売上高の推移



*2020/6期は6ヵ月の変則決算、24/6期は3Qであり、獣医師1人当たり売上高は年率換算数字



動物病院数 & 1病院当たり売上高、診療件数 & 診療単価の推移

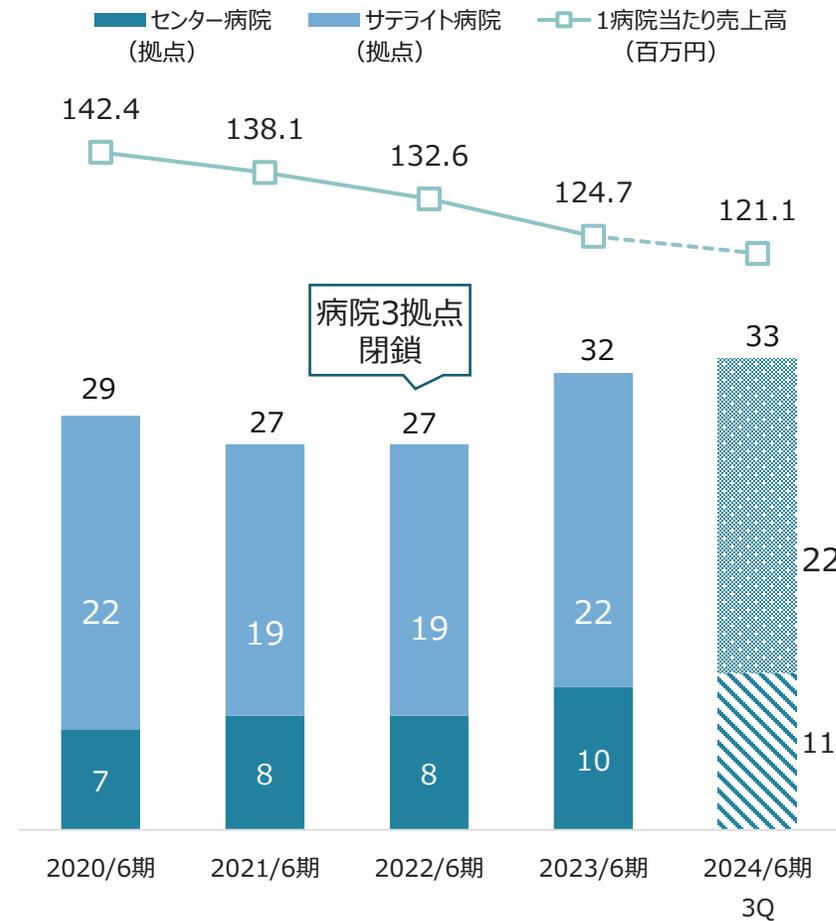
いずれも高水準で安定的に推移

● 診療件数、動物病院数も2022/6期を底に緩やかに増加中

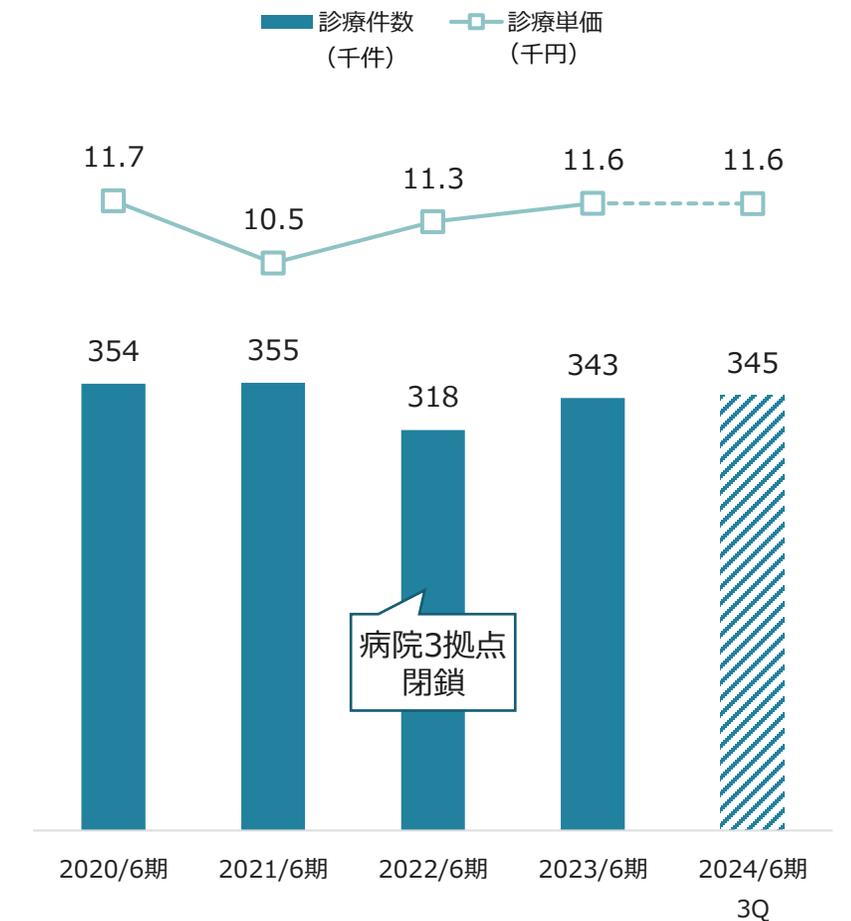
● 診療件数増の牽引役は、獣医師数と動物病院数の拡大。動物病院は、高度医療も可能なセンター病院を中心に、現在33拠点を展開

● 診療単価と1病院当たり売上高は、獣医師1人当たり売上高と同様、いずれも安定的に推移

動物病院数の推移



診療件数の推移



*2020/6期は6ヵ月の変則決算、24/6期は3Qであり、診療件数、1病院当たり売上高は年率換算数字

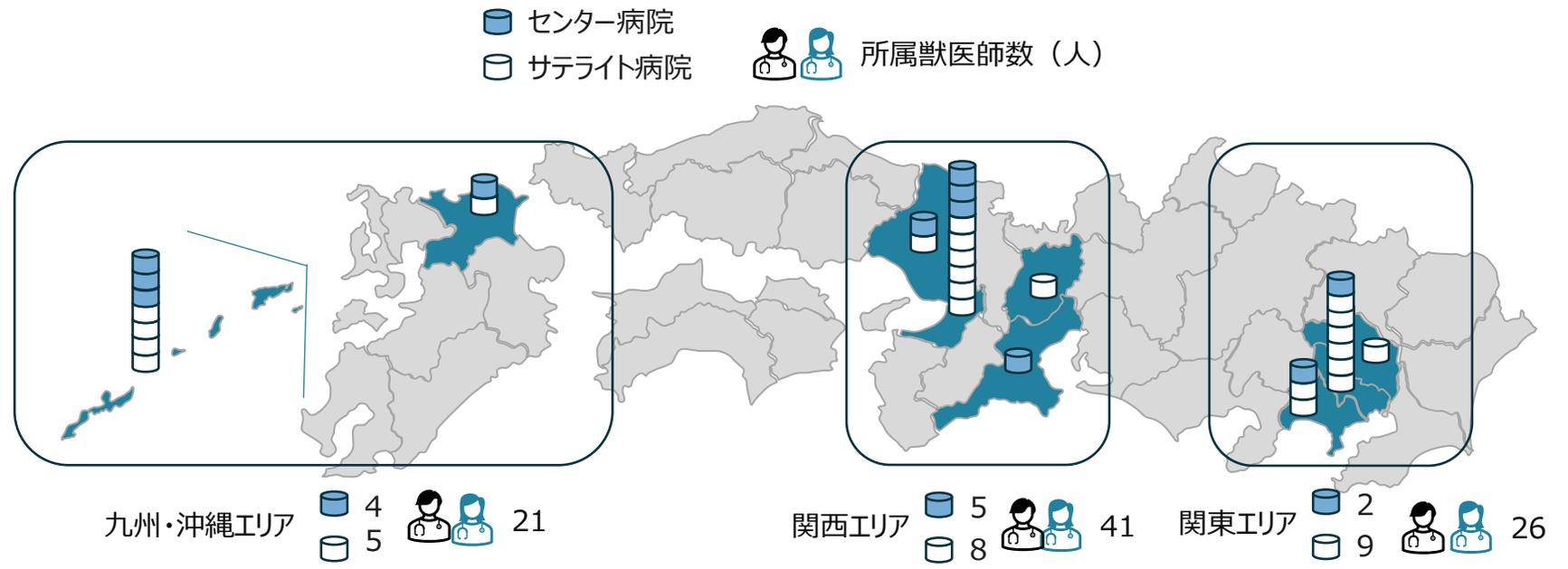


動物病院の地域展開と事業承継

関西をベースに関東・九州・沖縄に展開

- 大阪、兵庫、滋賀、三重、東京、埼玉、神奈川、沖縄、福岡の1都1府7県に展開
- 当初5拠点病院でスタート。その後、事業承継M&Aを中心に事業拠点を拡大
- 事業承継に至る背景は、病院経営のテコ入れや後継者育成、実質的な事業再生など様々なパターンが存在

動物病院 展開状況 (2024年3月現在)



● 2019年事業スタート時	5拠点	
● その後の自社開業（純数*）	5拠点	
● 事業承継	23拠点	2019/12期 20拠点
合計	33拠点	2021/6期 1拠点
		2023/6期 4拠点
		構造改革に伴う閉鎖 △2拠点

*1拠点閉鎖後。したがって、事業承継分の閉鎖2拠点と合わせ合計3拠点を閉鎖

財務ハイライト



決算年月*		2019年12月	2020年6月	2021年6月	2022年6月	2023年6月	2024年6月3Q
売上高	千円	635,907	2,023,735	4,178,802	4,295,031	4,651,067	3,523,301
経常利益	千円	64,275	213,154	669,445	713,325	800,881	508,018
親会社株主帰属当期純利益（損失）	千円	55,086	△1,942,395	244,041	316,866	506,125	310,326
資本金	千円	90,000	90,000	90,000	90,000	90,000	90,000
発行済株式総数							
普通株式	株	6,988,000	6,988,000	6,988,000	6,988,000	6,988,000	7,924,000
A種類株式		436,000	436,000	936,000	936,000	936,000	-
純資産額	千円	2,374,120	431,725	675,766	1,013,678	1,519,974	1,830,130
総資産額	千円	5,583,365	4,064,769	3,925,353	4,693,466	5,452,324	5,489,271
1株当たり純資産額	円	319.81	58.15	91.02	136.54	204.74	246.52
1株当たり当期純利益（損失）	円	11.66	△261.64	32.85	42.68	68.17	41.80
自己資本比率	%	42.5	10.6	17.2	21.6	27.9	33.3
自己資本利益率	%	4.6	-	44.1	37.1	39.9	18.5
営業キャッシュフロー	千円	-	-	-	607,902	951,319	-
投資キャッシュフロー	千円	-	-	-	△1,665,969	△644,294	-
財務キャッシュフロー	千円	-	-	-	617,337	△160,816	-
現金及び現金同等物の期末残高	千円	-	-	-	535,357	681,565	-
従業員数	人	162	347	359	364	397	383

*2019/12期は9ヵ月、2020/6期は6ヵ月の変則決算（2019/12期は、2019/6に動物病院事業取込み、実質的に事業開始）。2021/6期以前は単体決算



市場環境

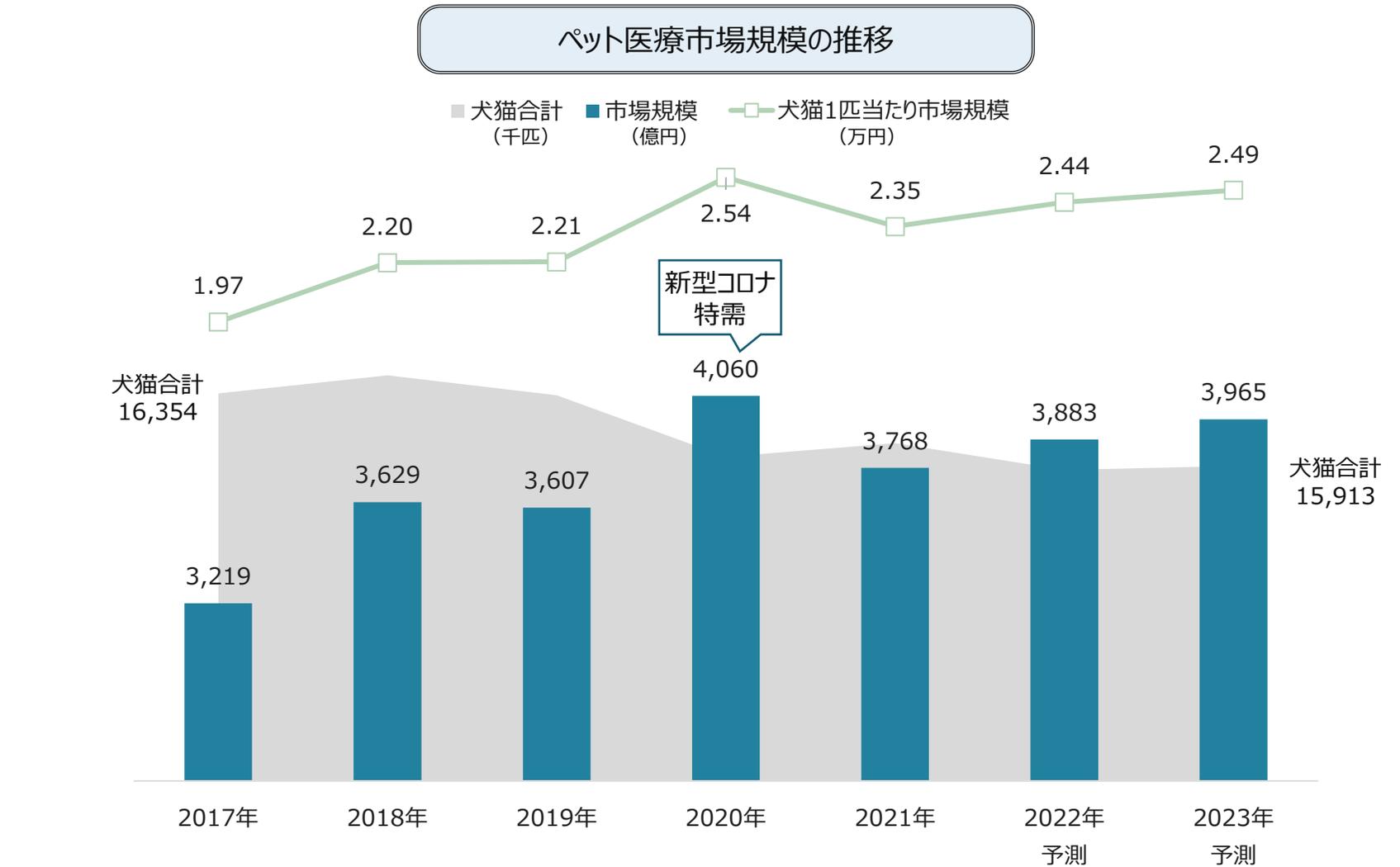
3



ペット医療市場規模は約4,000億円で増加傾向。ペット1頭当たり医療費も漸増中



- ペット医療市場規模は直近でおよそ4,000億円。コロナ時に一時的なペットブームがあったものの、概して緩やかな増加傾向で推移
- 一方、ペット数は漸減しているとの統計も。これを前提とすると、ペット1頭当たりの医療費は増加しており、手厚い対応がなされている傾向がうかがえる



(出所) 一般社団法人ペットフード協会「令和5年全国犬猫飼育実態調査」、株式会社矢野経済研究所「ペットビジネスマーケティング総覧2022年版」より当社作成

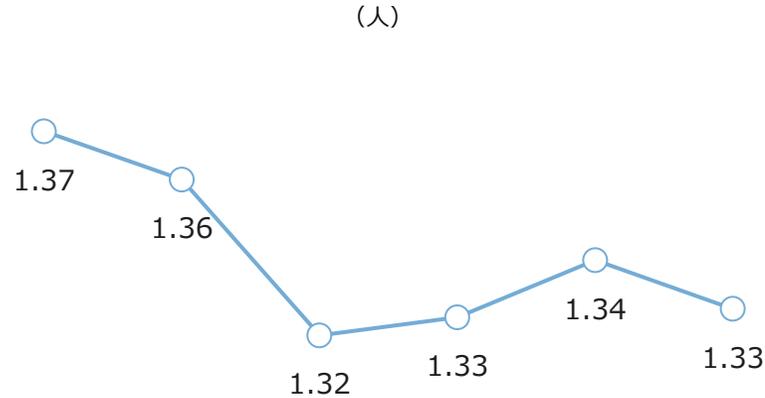


1施設当たり獣医師数の現状

獣医師2人以下の小規模動物病院が全体の8割以上（平均1.3人）

- 1施設当たり獣医師数はここ10年1.3人程度でやや低下気味と、構造的に小規模施設の割合が多い状況
- また、動物病院は就業獣医師2人以下の小規模施設が8割以上を占めている
- 当社主力の東京、大阪、沖縄でもその傾向は変わらず、獣医師2人以下の施設が8割前後

1施設当たり獣医師数の推移



2012年 2014年 2016年 2018年 2020年 2022年

*犬猫その他の小動物を対象

(出所) 農林水産省HP「獣医師の届出状況（獣医師数）」より当社作成

1施設当たり獣医師数の内訳

(2023年12月末現在)

<全国>

3人以上 17%

2人以下
8割超



<当社主力拠点（大阪・東京・沖縄）>

1,882施設

846施設

137施設



東京

大阪

沖縄

(出所) 農林水産省HP「飼育動物診療施設の開設届出状況（診療施設数）」より当社作成

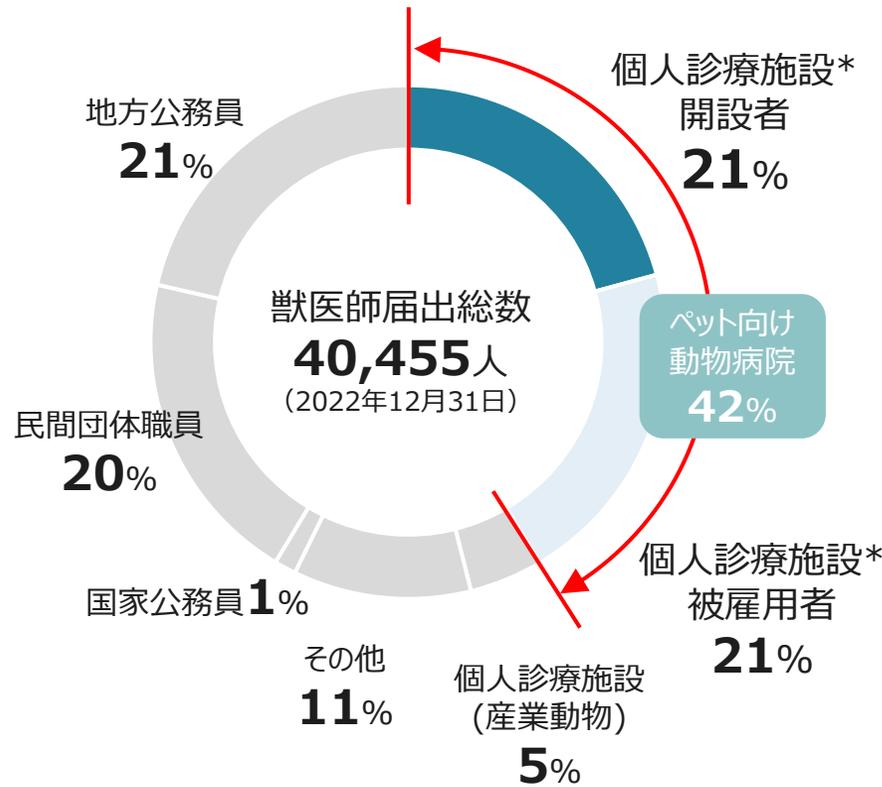


獣医師の現状

動物病院所属獣医師は全体の4割で年々高齢化。大学獣医学科の定員問題から供給人数も限定的

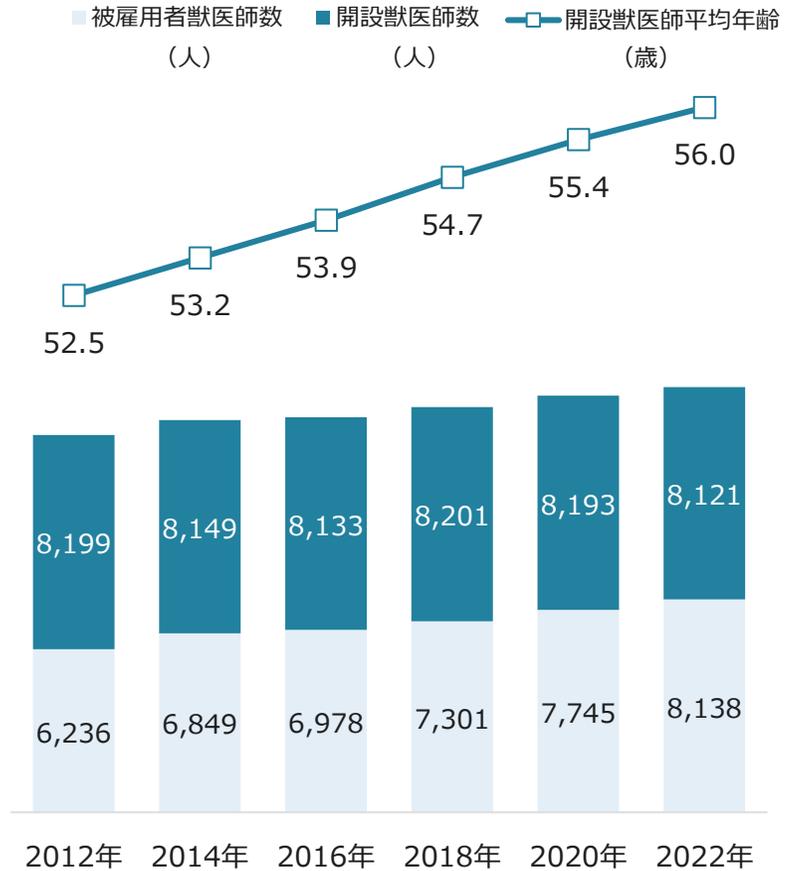
- 獣医師の内、動物病院を開設あるいは就業しているのは全体の4割強。内、開設者と就業者（“勤務医”）が半々を占める
- 動物病院の開設者数はここ10年ほぼ横ばいで、平均年齢は年々高齢化が進んでいる
- 一方、大学獣医学科の定員問題から獣医師の供給人数は限定的であり、獣医師の慢性的な不足傾向が伺われる

獣医師の内訳



*企業形態を含む。犬猫等の産業動物以外のペットを対象

動物病院*開設獣医師の推移



*企業形態を含む。犬猫対象施設のみ

(出所) 農林水産省HP「獣医師の届出状況 (獣医師数)」より当社作成



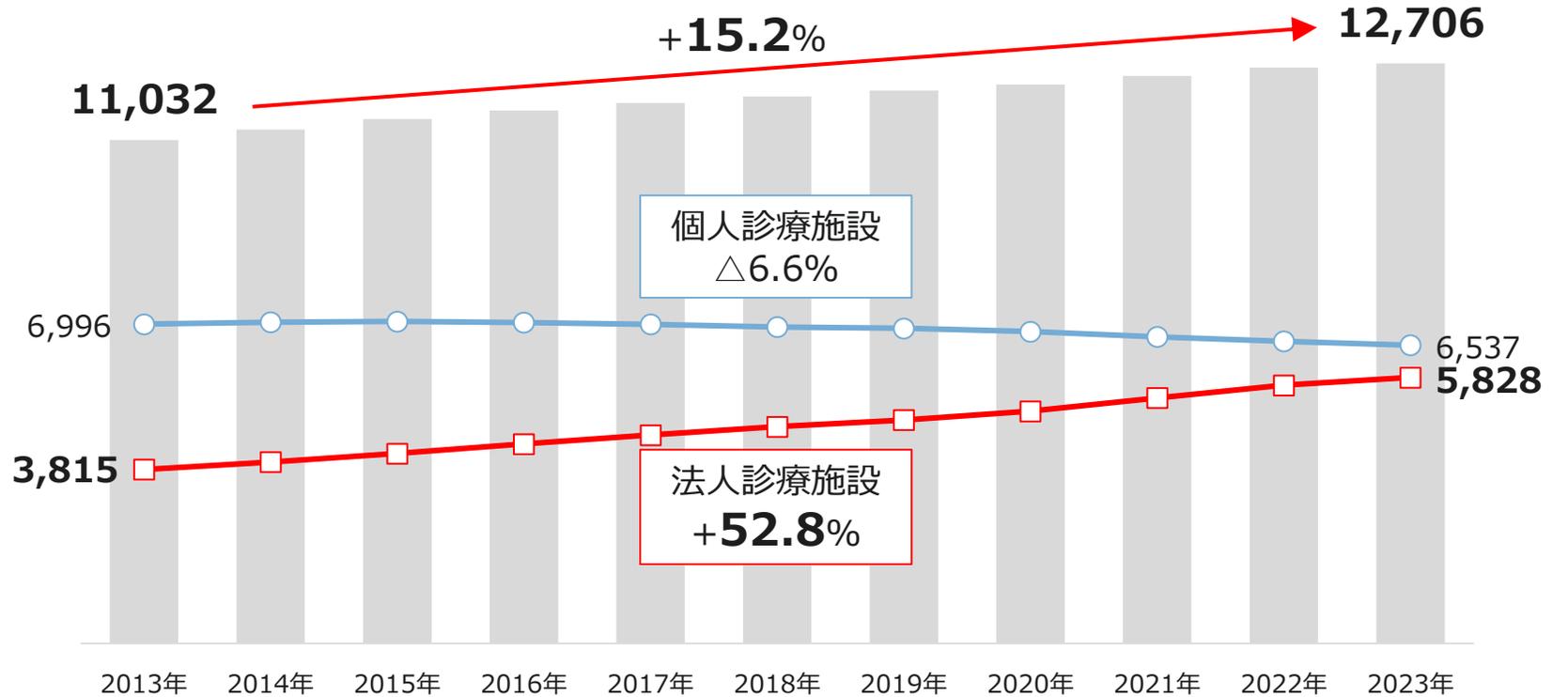
動物病院の現状

直近10年で法人経営の動物病院が5割増。一方、個人経営病院は漸減と対照的

- 犬猫等の飼育診療施設は、直近10年で15%増加。増加を牽引しているのは法人診療施設 (+53%)
- 一方、個人診療施設は同期間に7%減少し、飼育診療施設全体に占める割合が6割強から5割強に低下

犬猫等の飼育診療施設*の推移

(件) ■ 個人・法人診療施設合計 ● 個人診療施設 ■ 法人診療施設



*公的施設を除く。法人・個人経営の小動物その他（犬猫等）を対象とした診療施設

(出所) 農林水産省HP「飼育動物診療施設の開設届出状況（診療施設数）」より当社作成



特徴・強み（競争力の源泉）

4





I

どんな症例にも一貫対応可能な動物医療シームレス体制

II

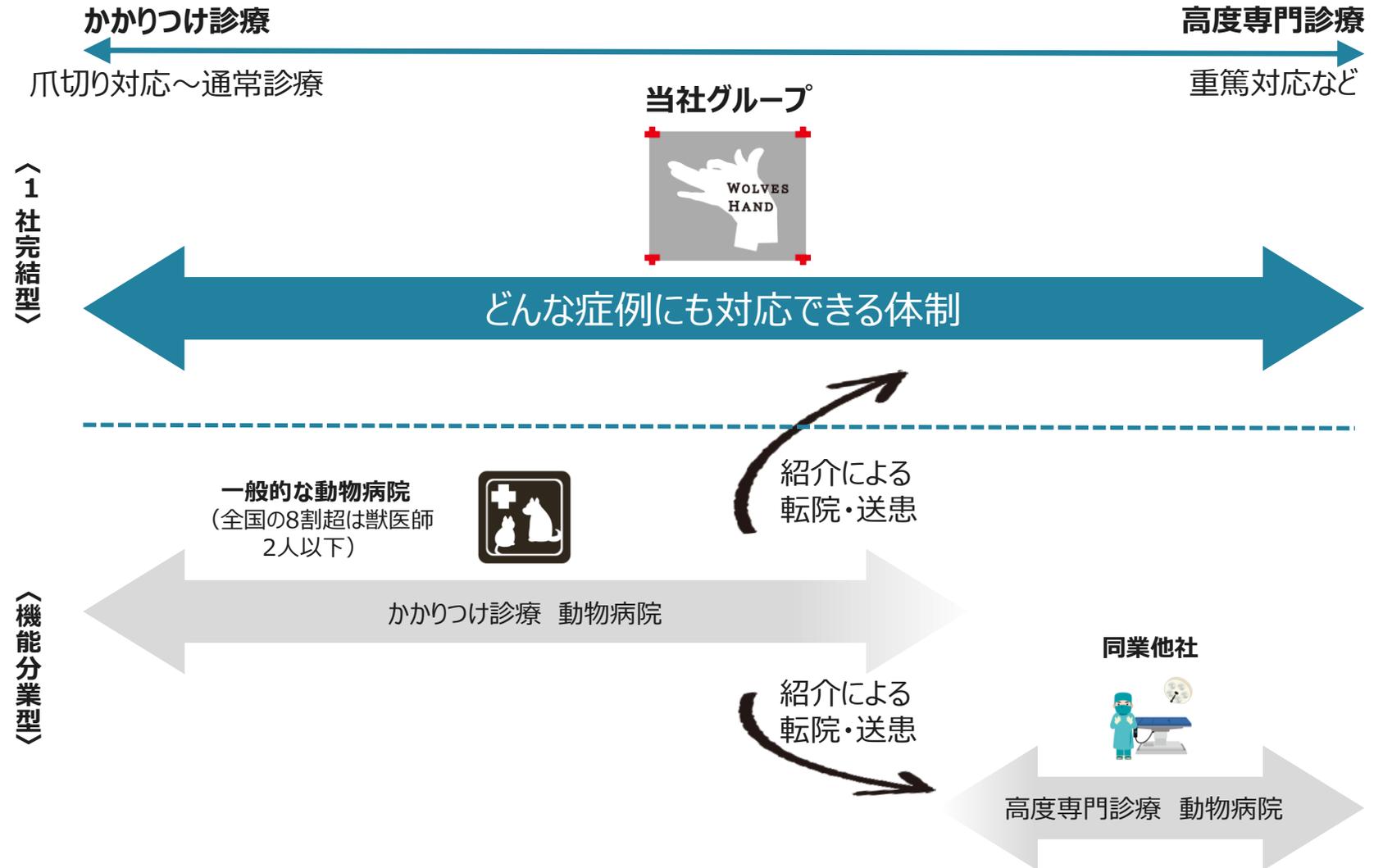
機会提供による獣医師診断力向上の仕組み

III

評判を軸とした事業拡大の好循環スキーム



- 一般的な動物病院は機能分業型が主流。かかりつけ診療と高度診療は別病院対応となっており、高度診療は紹介で受入れ
- 一方、当社はかかりつけ診療から高度専門診療まで一社で完結。外来・紹介双方にも対応できる一社完結型の動物病院は業界では少数派と認識





当社が選ばれる理由

動物飼い主の不安に対し結果を出し、ペットコミュニティでの口コミ、評判が浸透

- 動物飼い主の不安に対し、当社はそれらを緩和できる体制で対応

- 結果を出すことにより、近隣のペットコミュニティでの口コミ、評判浸透により、選ばれる対象に

動物飼い主の本音

- ✓ 動物は話せないため、どの病院が本当に腕が良いかわからない
- ✓ ペットが重い病気となった場合、病院のたらい回しは不安が募る
- ✓ 対ペット、対飼い主できちんとコミュニケーションしてくれる獣医師が有難い



WOLVES HAND

シームレス一貫体制により、飼い主の不安を緩和

- 高度医療も自社対応が可能のため、病院たらい回し回避を実現
- 当社病院で「必ず治療成果を出す」意識の徹底
- 通常医療も携わるため、普段から飼い主と密接なコミュニケーションを構築

近隣のペットコミュニティでの口コミ・評判浸透により、「選ばれる動物病院」に

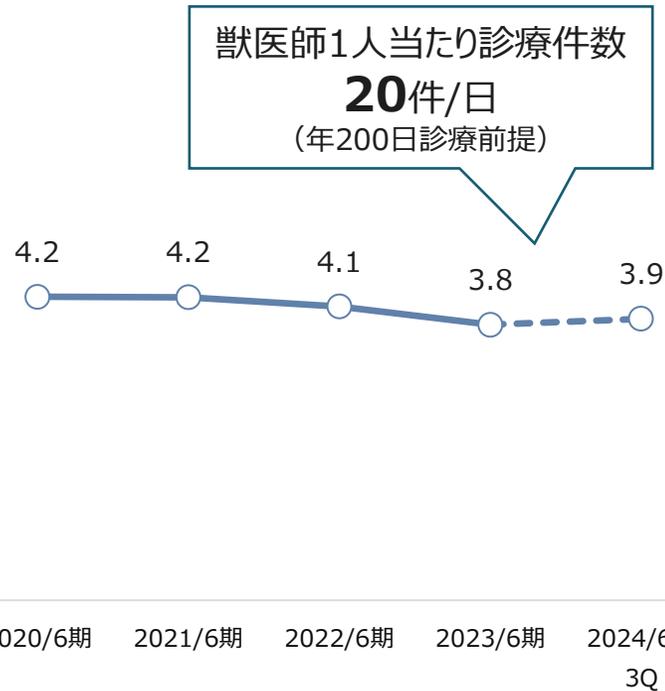


豊富な診療機会（獣医師1人当たり、1病院当たり） 経験こそが獣医師の診断力を促す仕掛け

- 獣医師は毎年4,000件程度の診療を実施。これは年200日診療を前提とすると、一日20件の対応ペース
- 病院当たりの診療件数も、同前提において一日60件の対応ペースで推移
- 獣医師は豊富な診療機会が得られ、必然的に能力が向上

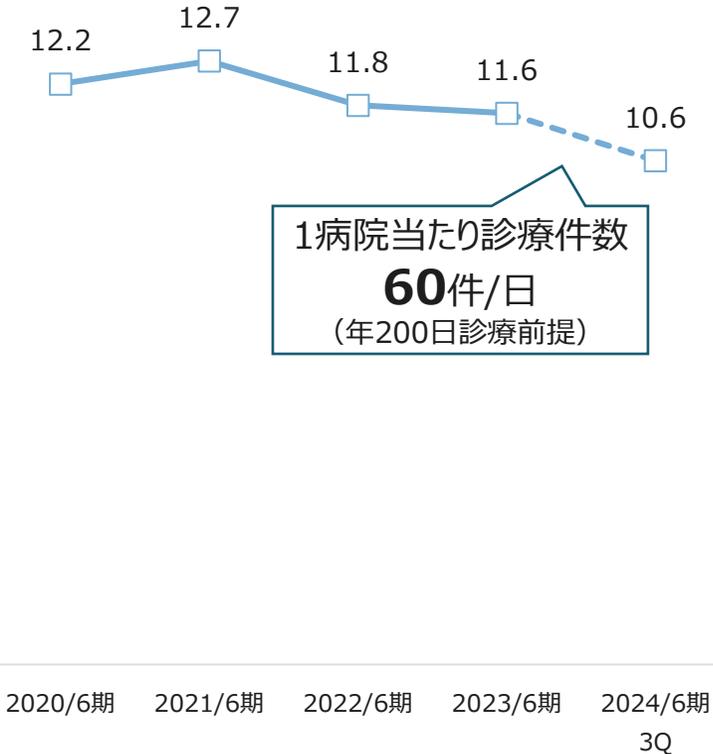
獣医師1人当たり診療件数の推移

(千件)



1病院当たり診療件数の推移

(千件)



*2020/6期は6ヵ月の変則決算、24/6期は3Qであり、年率換算数字



若手獣医師の育成システム

診療機会提供、技術継承、人事適正化などにより、早期戦力化システムとしてパターン化

- 当社の強みを持続させるには若手獣医師の実力育成は最重要課題
- 診療機会の提供、技術継承、人事適正化などにより、若手の向上意欲に訴求。早期戦力化システムとしてパターン化
- こうした若手獣医師の育成の仕組みがベテランに頼らず、新卒採用でのカバーを実現するカギに

経営の最重要方針

若手獣医師の実力育成



1

一貫体制に伴う豊富な診療機会の提供

あらゆる症例への対応を実践
それらを通じ、経験値を着実に積上げ

2

ベテラン医師からの技術継承機会の提供

臨床を通じて技術と知識を継承
当社病院は1拠点当たり約3人の獣医師を配置
複数の獣医師チームにより、若手が相談できる体制を構築

3

やる気に応じた人事登用システムの適用

マネジメント志向、職人志向など、各人の志向に応じ、
選択肢を提供
入社3～5年で病院長に抜擢も

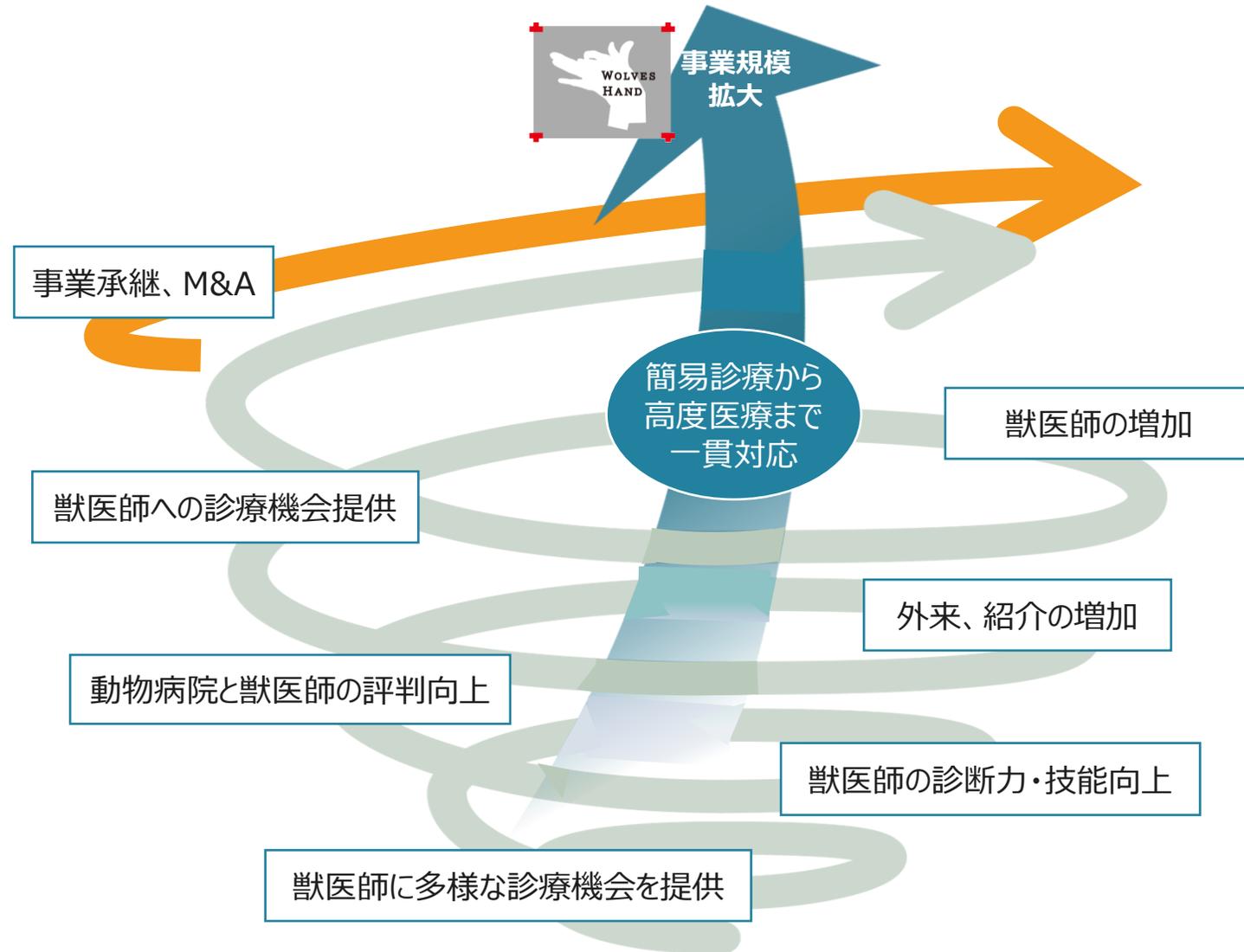
若手獣医師の早期戦力化を実現



自己増殖力

一貫対応を原点に獣医師の育成に注力した結果、ビジネスは好循環モデルを形成

- 一貫対応を原点に獣医師の育成に注力した結果、当社の顧客訴求力も上昇
- それが更なる診療機会拡大に繋がるという好循環を形成するという持続的事業規模拡大の循環モデルを構築





中期展望（事業計画）

5





I 更なる動物病院数の拡大

II 獣医師数の増員と獣医師1人当たり売上高の向上

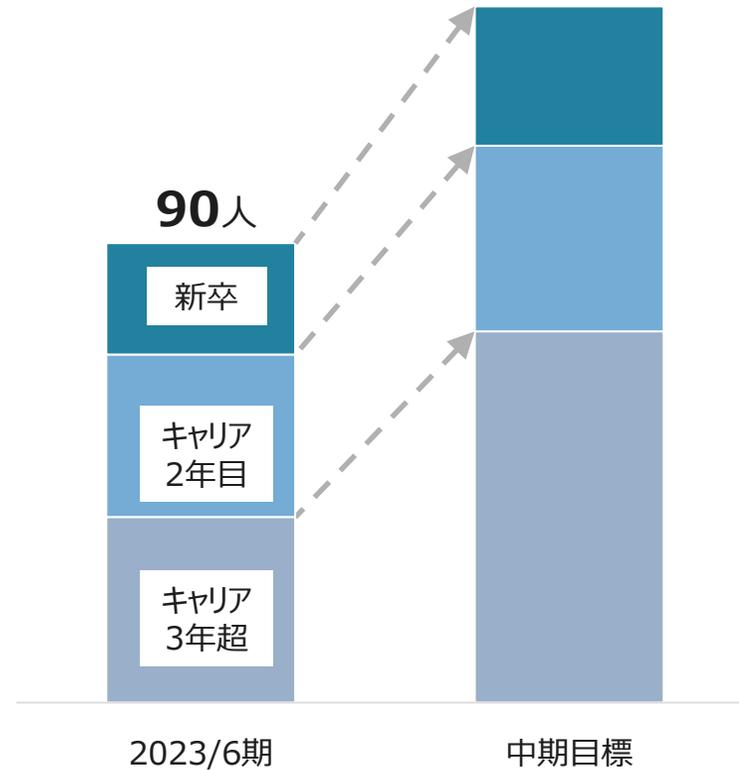
III 付随ビジネスの開拓



獣医師数の増員 新卒採用を軸とし、中期的には過半をキャリア3年超のベテラン勢が構成へ

- 獣医師数の増員は新卒採用を軸に設定
- 新卒獣医師は通常医療から高度医療まで様々な医療を手掛けたいと思っており、当社は受入れの門が広く、そのニーズに応えられる
- 一方、新卒育成と中途採用によるバランス化を図り、獣医師平均キャリアは現状水準を維持
- 中期的には全獣医師のうち、過半をキャリア3年超のベテラン勢が占める構成を目指す

獣医師の増員と比率



アクションプラン

- 新卒採用及び中途採用に注力
直近3期採用数 **39人**
- 特に、潤沢な診療機会の提供を訴求し、新卒採用に軸足
 - ✓ 採用専門のWEBページ作成
 - ✓ 紹介会社・各大学との提携関係の強化
- 中途採用による即戦力の補充も継続
- 所属獣医師の平均キャリアは、新卒増加の中でもバランスよく中途採用を進め、現状水準（**11.2年**）を維持

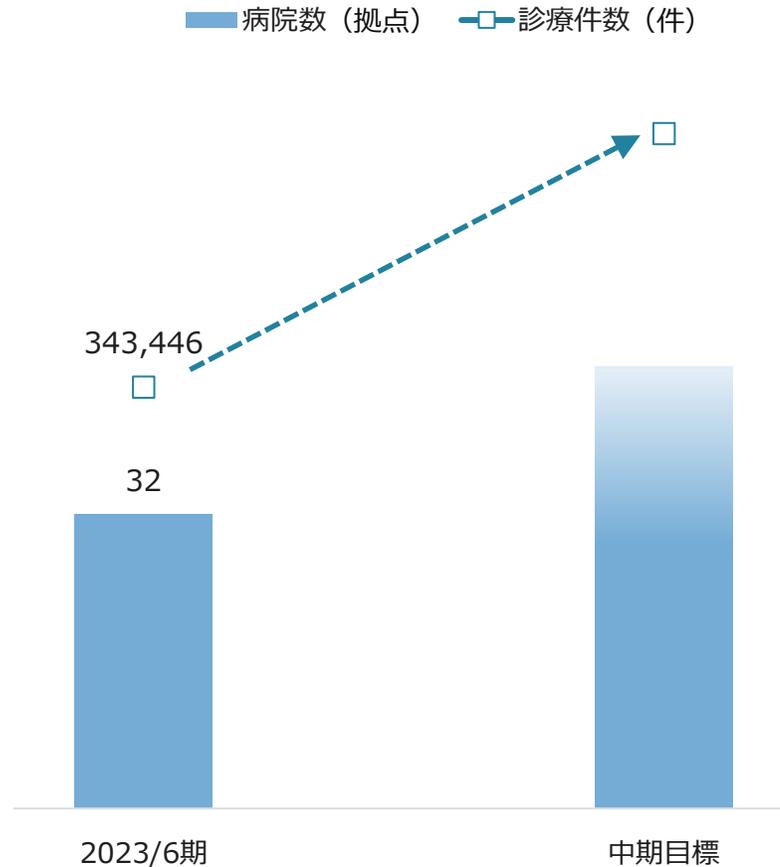


更なる動物病院数の拡大①

事業承継をベースに、当面は関東・関西・九州・沖縄エリアでの病院増設を計画

- 中期目標として、動物病院数を増やしつつ、診療件数のキャパシティを引き上げる見通し
- 様々なパターンの事業承継案件において、救済受け皿として、より積極的に行動

動物病院数 診療件数の中期目標



今後の増院計画

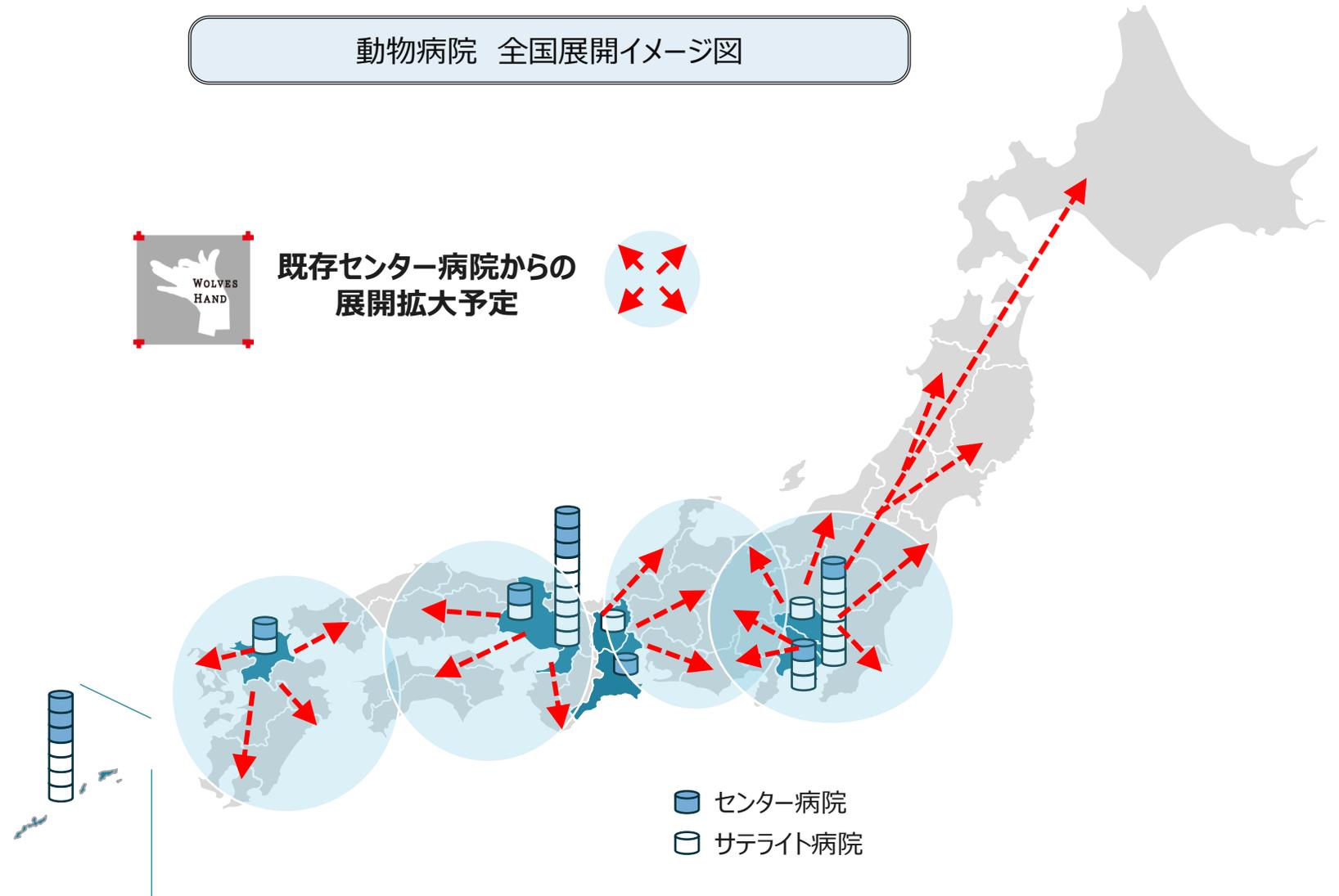
- 事業承継をベースとして、関東・関西・九州・沖縄エリアでの病院増設を計画
- 新規病院では獣医師数2名程度の配置を前提に想定。全国の飼育診療施設の6割強を占める「一人病院」とは差別化
- 個人病院の事業継承なども重要な選択肢



更なる動物病院数の拡大② 全国展開イメージ図 できるだけ速やかに全国展開に着手

- 飼い主の家の近接地に動物病院があることも来店客数拡大の重要な要素であるから、できるだけ速やかに全国展開を図る
- まずは、現状の大阪、兵庫、滋賀、三重、東京、埼玉、神奈川、沖縄、福岡の1都1府7県をベースに周辺に展開

動物病院 全国展開イメージ図





M&Aによる非連続成長のメリット

M&Aはエリア拡充、開院コスト抑制も非連続的に実現

- 獣医師平均年齢の上昇を背景に、個人経営を中心に動物病院の潜在事業承継ニーズは大
- 事業エリアの拡大、更なる病院数の拡大に向け、今後も必要に応じてM&Aの実施は常に選択肢として検討

獣医師平均年齢の上昇に伴う
事業承継ニーズへの対応

事業承継ニーズ
の受け皿

M&Aを通じた非連続な成長も有望な選択肢

エリアの拡充

開院コスト
の抑制

近接エリアの個人病院の事業承継
遠隔地におけるチェーン病院へのM&A

M&Aにより、初期投資の抑制と
スピード感を伴う事業拡大を実現



獣医師1人当たり売上高の向上

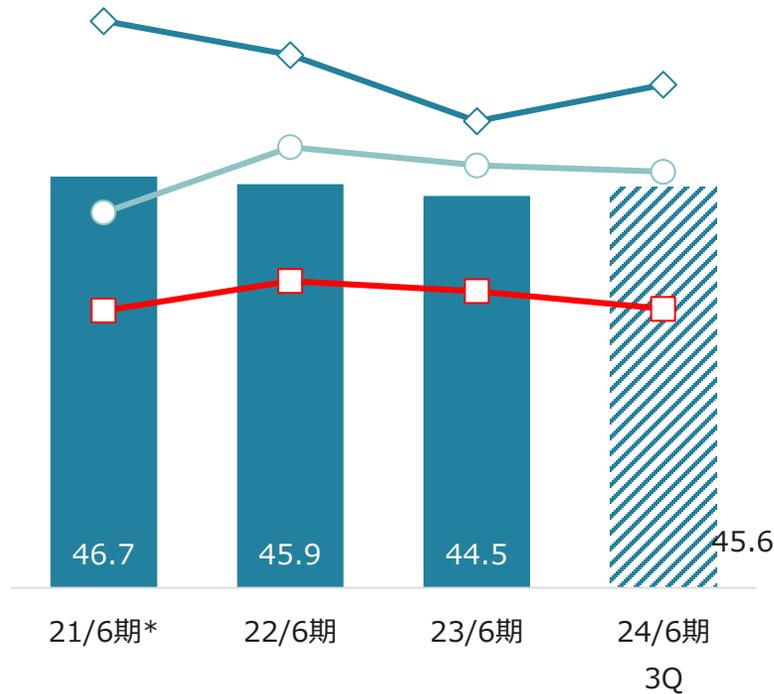
OJT等による新卒教育の徹底により、特に関東エリアの生産性改善などを図る

- 獣医師1人当たり売上高も、獣医師増員と同時に引上げを推進
- アクションプランとしては、OJTやVMNなどによる新卒教育の徹底に加え、相対的に低水準にある関東エリアの生産性の改善を図る方針
- 関東エリアのテコ入れ策は、人事交流、意識改革の加速、情報共有、などを計画

地域別の獣医師1人当たり売上高

(百万円)

■ 全体 ◆ 関西エリア ■ 関東エリア ○ 九州・沖縄エリア



*24/6期は3Qであり、年率換算数字

アクションプランなど

- 新卒等の教育
 - ✓ 新卒及びキャリア2年目が対象
 - ✓ OJTの強化
 - ✓ 情報提供サイト「VMN(Veterinary Medical Network)」の使用活性化
- 関東エリアのテコ入れ策
 - ✓ 人事交流
 - ✓ 意識改革の加速
 - ✓ 情報共有
 - 複数の獣医師を一病院に配置することでメンター医師による薫陶の提供
 - ✓ 飼い主に選んでもらえる動物病院としての評価浸透



付随ビジネスの開拓

成長加速に向け、共同研究による創薬・商品開発など動物医療関連ビジネスを想定

- 成長加速に向けて、動物病院に付随する新たなビジネスも開拓
- 獣医師向け情報サイトの収益化、電子カルテの外販、共同研究による創薬・商品開発を想定

基本戦略と注力領域

- 獣医師の診断力向上の加速領域



小動物臨床獣医師と獣医師を目指す学生を対象とした情報提供サイトの収益化

- 電子カルテなど顧客/会計管理などDX領域



わん太郎クラウド版「わん三郎」の外部販売

- 豊富な診療件数の臨床例活用



共同研究による創薬・商品開発
(→次ページ参照)



付随ビジネスの開拓例

当社の豊富な診療件数を活用し、大手医薬品会社等との連携により創薬・商品開発

● 共同研究による創薬・商品開発領域では、当社の豊富な診療件数を臨床例として活用

● 当社研究機関と大手医薬品会社/関連商品会社との連携により、治療方法の研究開発を実施。施術手法や医薬品の開発にも注力

● 動物医療の発展を臨床以外の側面からもサポートするために幅広い領域で研究

創薬・商品開発のビジネススキーム

- 社内研究機能「動物先端医療研究所」を通じ、ペット用品関連会社や医薬品会社と提携
- 当社は保有する治験データを活用し、ペット用商品、サプリ、医薬品等の開発を支援。当社に追加的なコスト負担は発生せず
- 臨床・治験支援を可能とするのは、**シームレスな医療体制下において豊富な診療件数を有するため**。ペット用品関連会社や医薬品会社が当社と連携する意味も大
- ペット関連用品では当社ブランドの活用を想定。提携先からは数量にリンクした当社商標権の使用料を収受。創薬関連でも当社貢献に合わせたレベニューシェアシステムを想定



当社

臨床支援



商標権使用料
レベニューシェア



ペット用品関連会社
大手医薬品会社

動物先端医療研究所

- 2023年4月、社内に設置
- 動物医療に関する治療法等などの継続的研究
- 創薬や医療用品等の開発について他社と共同研究や治験等を実施
- 人員体制：現状4人
- 岡本芳晴獣医学博士を担当執行役員に登用（鳥取大学農学部獣医学科元教授）

岡本芳晴獣医学博士



- 特許、原著論文、著書、所属学会における活動、学会賞等の学術的表彰・教育表彰など、豊富な実績（⇒別紙参照）

(ご参考) 岡本芳晴 獣医学博士の実績等①



● 原著論文 (レフリー制のあるもの)

- ① TSUKA, T., OKAMOTO, Y., SUNDEN, Y., MOITA, T., AMAHA, T., ITO, N., YUSUKE MURAHATA, Y., YAMASHITA, M., OSAKI, T., IMAGAWA, T.: Ultrasonography and magnetic resonance imaging of anterior segment dysgenesis in a calf. *Frontiers in Vet. Sci.* (IF=3.12), doi: 10.3389/fvets.2022.794255. 2022.3
 - ② YAMASHITA, M., MURAHATA, Y., YOKOE, I., OKAMOTO, Y., IMAGAWA, T.: Imaging findings and outcomes after traumatic cerebellar injury: a canine case report. *BMC Vet. Res.* (IF=2.71), 18:123 doi.org/10.1186/s12917-022-03220-9 2022.3
 - ③ TSUKA, T., TAKAO AMAHA, T., OKAMOTO, Y.: Diagnostic and therapeutic evaluations of computed tomography in three calves with unilateral otitis media treated with ventral bulla osteotomy. *Vet. Sci.* (IF=1.679), 9(5); pii: 218 2022.4
 - ④ OKAMOTO, Y., ISHIZUKA, M., SUMIYAMA, F., KOSAKA, H., SUGANAMI, A., TAMURA, Y., SEKIMOTO, M., KAIBORI, M.: Inhibitory Effects and Gene Expression Analysis of Chemotherapeutic Photodynamic Therapy by using a Liposomally Formulated Indocyanine Green Derivative. *Photodiagnosis and photodynamic therapy.* (IF=3.39), pii: S1572-1000(22)00247-2. 2022.6
 - ⑤ YOROZU, K., KAIBORI, M., KIMURA, S., ICHIKAWA, M., MATSUI, K., KANESHIGE, S., KOBAYASHI, M., JIMBO, D., TORIKAI, Y., FUKUZAWA, Y., OKAMOTO, Y.: Experience with photodynamic therapy using indocyanine green liposomes for refractory cancer. *J. Personalized Med.* (IF=4.453), 12(7); pii: 1039. 2022.6
 - ⑥ SHINODA, K., SUGANAMI, A., MORIYA, Y., YAMASHITA, M., TANAKA, T., SUZUKI, A. S., SUITO, H., AKUTSU, Y., SAITO, K., SHINOZAKI, Y., ISOJIMA, K., NAKAMURA, N., MIYAUCHI, Y., SHIRASAWA, H., MATSUBARA, H., OKAMOTO, Y., NAKAYAMA, T., TAMURA, T.: Indocyanine green conjugated phototheranostic nanoparticle for photodiagnosis and photodynamic reaction. *Photodiagnosis and photodynamic therapy* (IF=3.39), pii: S1572-1000(22)00327-1 2022.7
 - ⑦ OCHI, K., SUZAWA, K., THU, Y. M., TAKATSU, F., TSUDAKA, S., ZHU, Y., NAKATA, K., TAKEDA, T., SHIEN, K., YAMAMOTO, H., OKAZAKI, M., SUGIMOTO, S., SHIEN, T., OKAMOTO, Y., TOMIDA, S., TOYOOKA, S.: Drug repositioning of tranilast to sensitize a cancer therapy by targeting cancer-associated fibroblast. *Cancer Sci.* (IF=6.716), doi: 10.1111/cas.15502 2022.7
 - ⑧ UTSUGI, S., OGIHARA, K., NAYA, Y., SUNDEN, Y., NAKAMOTO, Y., OKAMOTO, Y.: Expression of L-type amino acid transporter 1 in canine and feline intracranial tumors. *J. Vet. Med. Sci.* (IF=1.267), 84(8);1111-1117. 2022.8
 - ⑨ SASAKI, J., OKAMOTO, Y., SOMEYA, T., MINEGISHI, Y. High temperature manufactured Corbicula japonica shell powder (Carcite type crystal structure) improved diabetes in mouse. *World J. Adv. Res. and Reviews.* (IF=7.8), 15(02), 186-190 2022.8
- …その他多数

● 著書

- ① 岡本芳晴 (分担) 第5章 生体細胞親和性 キチン・キトサンハンドブック、矢吹 稔 編、技報堂、東京、pp. 179-202 1995
- ② 岡本芳晴 (分担) 眼瞼に異常を認める疾患 猫の臨床 前出吉光 監修、デイリーマン社、札幌、pp.672-675, 684-686 2004
- ③ 岡本芳晴 (分担) 第2章 腹部のヘルニア 小動物外科学大系 (ヘルニア)、山根義久 総監修、インターズー、東京、pp. 12-20 2005
- ④ 岡本芳晴 (分担) 第3章 呼吸器疾患 獣医内科学 (大動物編)、川村清一、内藤善久、前出吉光 監修、文永堂、東京、pp.57-58 2005
- ⑤ 岡本芳晴 (分担) 第6章 眼科の救急処置 小動物外科学大系 (救急治療)、山根義久 総監修、インターズー、東京、pp. 154-185 2006
- ⑥ OKAMOTO, Y.(part) Biomedical Materials from chitin and Chitosan. In: *Material Science of Chitin and Chitosan*, Uragami, T., Tokura, S., eds., Kodannsha, Tokyo, pp. 191-218 2006
- ⑦ 岡本芳晴: 小動物最新外科学大系 8 初版, 泌尿生殖器2, ISBN4-89995-411-5 C3047, 第1章・卵巣・子宮, 第4節 早期不妊手術, pp. 44-57, 第5章・乳腺, 第2節 乳腺の疾患, pp. 120-139, 山根義久, 高瀬勝悟, 中間實徳, 南 三郎, 武藤 真, 山村穂積編, インターズー, 東京, 2006
- ⑧ 岡本芳晴 (分担) 犬の臨床 前出吉光 監修、デイリーマン社、札幌、pp.52, 382-384, 653-654, 730-731, 736-737 2007.3
- ⑨ 岡本芳晴 (分担) オゾン溶解水の使用、獣医療にオゾンを生かす、鷺巣 誠、清水無空 監修、ファームプレス、東京、pp.94-102 2014
- ⑩ 岡本芳晴 (分担) 第15章 キチンナノファイバーの生体機能、第16章 キチン・キトサンの獣医臨床領域への応用 キチン・キトサンの最新科学技術、日本キチン・キトサン学会編、技報堂、東京、pp. 239-270 2016
- ⑪ 岡本芳晴 (分担) 3章 眼 眼瞼外反の整復術 見てわかる小動物の外科手技I マイナー・サージェリー、多川政弘、浅野和之、泉澤康晴、兼島 孝、村中志朗、望月 学 監修、インターズー、東京、pp.110-120 2018
- ⑫ 岡本芳晴 (分担) 蛍光イメージング実践ガイド 日本蛍光ガイド手術研究会編 メディカルビュー、東京、pp. 321-335 2020

（ご参考）岡本芳晴 獣医学博士の実績等②



● 所属学会等における活動状況

日本獣医学会（評議員2001～）、獣医麻酔外科学会、日本小動物獣医学会、キチン・キトサン学会（理事2016～）、日本産業動物獣医学会、日本バイオマテリアル学会、日本内視鏡外科学会、日本光線力学学会（幹事2008～）、日本医療・環境オゾン学会（理事2010～）、日本レーザー獣医学研究会（会長2012～）、日本獣医再生医療学会（評議委員2013～）、比較統合医学会（理事2014～）

● 学会賞等の学術的表彰、教育表彰

- ① 平成5年度鳥取大学科学研究業績表彰「天然多糖β-キチンの創傷治癒促進機構解析とその臨床効果」
- ② 平成8年度日本小動物獣医学会（中国）学会長賞 米村大輔、南 三郎、**岡本芳晴**、大平純二、吉田 勉、松橋 皓。「ヘマトポルフィリン-Dを用いた光線力学的療法（PDT）の基礎的検討と臨床応用」
- ③ 平成11年度日本小動物獣医学会（中国）学会長賞 **岡本芳晴**、井上輝男、南 三郎。「耳介輪軟骨を温存する新しい外耳道全摘出術」
- ④ 平成15年度日本小動物獣医学会（中国）学会長賞 田中博二、**岡本芳晴**、富田 保、高野佳子、南 三郎。「猫の早期不妊手術：99例」
- ⑤ 平成16年度日本小動物獣医学会（中部）学会長賞 山田英一、住吉 浩、片野修一、山我義則、柴田武志、**岡本芳晴**。「犬の門脈体循環シャントにおける造影3D-CT法の検討」
- ⑥ 平成17年度日本小動物獣医学会（中国）学会長賞 **岡本芳晴**、岡村泰彦、辻野久美子、実方 剛、森田剛仁、前田憲孝、松田和義、荻原喜久美、南 三郎「動物の自然発症腫瘍に対する自家がんワクチンの作製とその有効性：57例」
- ⑦ 平成19年度日本小動物獣医学会（中国）学会長賞 **岡本芳晴**、神田鉄平、柄 武志、岡村泰彦、南三郎、辻 和弘「瞳孔緊張症が疑われる犬2例」
- ⑧ 平成20年度日本小動物獣医学会（中国）学会長賞 辻 和弘、柄 武志、岡村泰彦、今川智敬、**岡本芳晴**、南 三郎「両側膝蓋骨外側上方脱臼の馬1例」
- ⑨ 平成21年度日本小動物獣医学会（近畿）学会長賞 小野山真生、高山孝博、山本悟史、松田和義、小川信彦、**岡本芳晴**「新しい動物のがん治療法ーインドシアングリーンを用いた光線力学的温熱化学療法ー」
- ⑩ 平成22年度日本小動物獣医学会地区（中国）学会長賞 松島伸昭、柄 武志、今川智敬、大崎智弘、南 三郎、**岡本芳晴**「悪性黒色腫と扁平上皮癌に対するルペオールの臨床応用」
- ⑪ 平成24年度日本小動物獣医学会地区（中国）学会長賞 南 三郎、大崎智弘、柄 武志、今川智敬、**岡本芳晴**「猫の外傷に対するN-アセチルグルコサミンを持ちいた創傷治癒効果」
- ⑫ 平成24年度中国地方発明表彰「発明奨励賞」南 三郎、**岡本芳晴**「創傷の治療又は処置のための薬剤」
- ⑬ 日本レーザー医学会査読賞（2014年） **岡本芳晴**
- ⑭ 第61回比較統合医療学会学会賞（2018年） 川端 圭佑、塩田 剛太郎、**岡本 芳晴**、「オゾンジェルを用いた牛皮膚真菌症の治療経験」

主要KPI



事業KPI

獣医師数 **90**人

診療件数 **343,446**件

診療単価 **11.6**千円

動物病院数 **32**拠点

（注）2023/6期

財務KPI

売上高成長率
(2021/6期⇒23/6期) **+5.5%**

EBITDAマージン **24.1%**

ROE **39.9%**

自己資本比率 **27.9%**

（注）2023/6期実績



主な投資内容

設備投資
(動物病院)

人財投資
(獣医師)

DX推進
(わん太郎)

財務状況

	2023/6期	2024/6期 3Q末
現金	6.9億円	5.6億円
のれん	16.1億円	15.0億円
有利子負債	32.2億円	30.1億円
自己資本	15.1億円	18.3億円
Net D/Eレシオ※1	1.67x	1.34x
自己資本比率※2	27.9%	33.3%
のれん/純資産倍率※3	1.06x	0.82x

*1 : Net D/Eレシオ = (短期借入金 + 1年以内返済予定の長期借入金 + 長期借入金 + リース債務 - 現金及び預金) ÷ 自己資本

*2 : 自己資本比率 = 自己資本 ÷ 総資産

*3 : のれん/純資産倍率 = のれん ÷ 自己資本



APPENDIX

6



主な事業等のリスク

以下は、事業遂行において重要な影響を与える可能性があると認識している主要なリスクです。その他のリスク情報については、有価証券届出書「第二部【企業情報】第2【事業の状況】2【事業等のリスク】」をご参照ください。



項目	発生可能性	影響度	対応策など
<ul style="list-style-type: none"> ● 関連法令の規制 当社グループの動物病院事業につきましては、「獣医師法」、「獣医療法」、「動物の愛護及び管理に関する法律」その他法令により規制を受けているが、今後、それらの法令の改廃又は新たな規制が設けられる場合には、当社グループの事業展開及び業績に影響を及ぼす可能性あり 	中	小～大	<ul style="list-style-type: none"> ✓ リスクマネジメント委員会、コンプライアンス委員会を組織し、コンプライアンス体制の充実にに向けた取り組みを推進する他、内部監査により法令遵守の状況を確認 ✓ 現時点においては、行政処分に該当する事象は発生していないものと認識
<ul style="list-style-type: none"> ● 飼育動物頭数 当社グループは、動物病院事業を主たる事業領域としていることから、飼育動物(特に犬猫)の頭数の影響を大きく受けると考えられる。飼育動物の全体の頭数は2013年以降緩やかに減少傾向にある一方で、新型コロナウイルス感染症拡大の影響でペットとの生活から癒しを求めたり、家族内でコミュニケーションを深めることを目的に新規飼育頭数は増加傾向にある。今後の飼育頭数の推移については人口動態や景気動向によると考えられるが、飼育頭数が減少した場合には、当社グループの事業展開及び経営成績に影響を及ぼす可能性あり 	中	中	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 当該リスクは長期的な期間で顕在化する可能性はあるが、短期的に顕在化する可能性は低いと考えており、また、高品質の医療サービス及び高度医療を提供していく体制維持を継続することで、顧客の確保及び診療単価上昇によるリスクの軽減を図っている
<ul style="list-style-type: none"> ● 医薬品や医療用消耗品及び医療機器価格 当社グループは、動物病院事業を主たる事業領域としていることから、動物病院運営で使用する医薬品や医療用消耗品及び医療機器の価格水準の影響を大きく受けると考えられる。新型コロナウイルス感染症拡大の影響等による昨今の世界的な原材料費や輸送費の高騰に伴い、医薬品、医療用消耗品、医療機器においてもメーカー側での値上げが相次いでおり、今後もこの状況が継続した場合には当社グループの事業展開及び経営成績に影響を及ぼす可能性あり 	中	中	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 当該リスクが顕在化する可能性は高くはないと考えておりますが、価格水準の上昇に合わせて医薬品代や診察単価の改定等の対応を実施することでリスクの軽減を図っている
<ul style="list-style-type: none"> ● 人材の確保及び育成について 二次診療を含めた高度医療の継続的・安定的な供給のためには、臨床経験及び専門知識の高い優秀な獣医師の確保及びその育成と定着が重要な課題。獣医師数は近年増加傾向にあるが、獣医学生のリクルートに関しては激化傾向にある。必要な人材を採用できない場合、また育成した役職員が当社の事業に寄与しない又は社外流出した場合には、当社グループの事業展開、財政状態及び経営成績に影響を及ぼす可能性あり 	小	中	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 獣医大学や人材紹介会社と連携しながら説明会の開催や実習の受け入れを積極的に実施することで獣医大学新卒者を確保する取り組みを進めるとともに、入社社員に対する定期的な研修、指導医によるOJT、獣医療教育コンテンツであるVMNの無料視聴等の教育施策、社内評価制度の充実・労働環境の整備等を進めることで育成と定着率の向上を図っている
<ul style="list-style-type: none"> ● M&A及び事業承継について 当社グループは、今後の事業拡大及び収益力向上のため、国内外を問わず動物医療施設の買収や事業承継を実施する場合がある。当社グループとしては、M&A実施に当たり、リスク及び回収可能性を十分に事前評価して取引を行っているものの、買収先の事業の状況が当社グループに及ぼす影響を確実に予測することは困難な場合があり、投資額を回収できなかった場合、事前評価で検出されなかった重要な問題が生じた場合及び買収時ののれん等の減損処理を行う必要が生じた場合、当社グループの財政状態及び経営成績に影響を及ぼす可能性あり また、M&A後の統合プロセスが計画通りに進まない場合等予測不能な事態が発生した場合には当社グループの財政状態及び経営成績に影響を及ぼす可能性あり 	小～中	小～中	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 適切なデューデリジェンス及び取締役会等での協議においてリスク及び回収可能性を十分に事前評価している



年	月	内容
2019	4	東京都千代田区に動物病院の運営を主たる事業として、(株)WOLVES Handを設立
	5	(株)大冬希、(株)Vパワーを株式取得により買収
	6	(株)ベイサイドアニマルクリニックを株式取得により買収 同日、(株)ベイサイドアニマルクリニックが(株)南動物病院から動物病院事業((株)ペット・ペットの株式を含む)を事業譲受により取得 獣医療教育セミナー事業を開始
	8	(株)大冬希、(株)Vパワーを吸収合併 本社を東京都千代田区から大阪市西区に移転
	10	アイル動物病院(現：オオナミ動物医療センター)を事業譲受により取得 (株)ワンヘルスコーポレーションからローコストペットクリニック沖縄(現：那覇動物病院)を事業譲受により取得 JVCC(株)の株式を対価として吸収合併し、同時にJVCC動物病院グループ(株)を子会社化
	11	北谷動物医療センター、名護動物医療センターを開院
2020	1	(株)ベイサイドアニマルクリニック、JVCC動物病院グループ(株)を吸収合併
	4	わん太郎(株)を株式取得により買収し、動物病院向けソフトウェアの開発を開始
	10	豊見城動物高度医療センターを開院
2021	3	(有)空楽(現：高輪台動物病院)を株式取得により買収
	7	(有)空楽、わん太郎(株)を吸収合併
2022	4	商号を(株)WOLVES HANDに変更
	7	ペットプラス動物病院福岡を開院
	10	(株)モデナ動物病院を株式取得により買収
	11	(株)ペットメディカルセンター・エイルを株式取得により買収
2023	5	飛鳥メディカル(株)を関連会社化



本資料の取り扱いについて

- 本資料に記載されている将来予想に関する記述は、本資料の日付現在において当社が現在入手可能な情報を勘案した上での、当社の現時点における仮定及び判断に基づくものであり、既知及び未知のリスク、不確実性その他の要因を含んでいます。当該リスク、不確実性その他の要因により、当社の実際の業績又は財務状態が、将来予想に関する記述により表示又は示唆されている将来の業績又は財務状態から大きく乖離する可能性があります。
- 当社以外の会社又は当事者に関連する情報又はそれらにより作成された情報は、一般的に入手可能な情報及び本資料で引用されているその他の情報に基づいており、当社は、当該情報の正確性及び適切性を独自に検証しておらず、また、当該情報に関して何らの保証もするものではありません。
- 本資料は、当社の関連情報の開示のみを目的として作成したものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。当社の有価証券への投資判断は、ご自身の判断で行うよう、お願いいたします。
- なお、本資料及びその記載内容について、当社の書面による事前の同意なしに、公開又は利用することはできません。
- 進捗状況を含む最新の内容を記載した「事業計画及び成長可能性に関する事項」の開示は、毎年8月を目途に実施する予定です。